

優秀賞

加害者でも被害者でも残された家族

(兵庫) 姫路合同貨物自動車(株)

平島 拓也

(体験記) と言う事でありますので、私の交通安全と無事故の秘訣、実体験を紹介致します。私の無事故の秘訣は、時間に余裕を持った運転と行動です。これが一番の秘訣だと考えます。時間に余裕があれば、心のゆとりや行動のゆとりができ、安全運転に繋がります。スピードを出す必要も無く、無駄な車線変更に追越しなども必要ありませんし、譲り合う気持ちも生まれます。

ですが、時間に追われ心にゆとりが無ければ、どうしても先を急ぎ車間距離を詰め、危険運転になります。スピードを上げ、無駄な車線変更に追越し、止まれるはずの黄色信号も通過する可能性も出てきます。

その時点で、譲り合う気持ちなどあるわけありません。私が思うには、50kmで走行しようが、60kmで走行しようが、到着時間は変わりません。皆様も経験があるのではないですか？ 凄いスピードで抜き去った車が先の信号で止まっている。まさにこれです。結局時間に変わりはないのです。

私は目的地まで1時間かかるのであれば、1時間30分前と、最低でも30分余裕を持って出発します。そうする事で時間に追われる心配は無くなり、心に余裕が生まれます。スピードを上げる事も無く車線変更、追抜きもする必要もありません。

十分な車間距離を保ち、交差点でもゆっくりと歩行者の通行を待つ事が出来ると思います。そしてゆずる気持ちも生れます。私はそう思い、日々運転しております。

誰もが譲り合う気持ちで運転すれば、防ぐことの出来る事故が大半ではないでしょうか。それでも起きてしまう事故。

車と言う凶器を運転する皆様へ

事故に関わり、残された家族がどのような生活を送るか、(体験記) と言う事もあり、私の実体験を紹介させていただきます。

事故の連絡は突然でした。38年前、母が30歳、兄が7歳、私は4歳の時でした。父を32歳と言う若さで亡くしました。父は職場である西宮市から自宅の三田市に向かう途中、六甲有料道路で事故に合いました。大型トラックとの正面衝突。軽自動車に乗っていた父は内臓破裂の即死だったそうです。私は遺影で見る父の記憶しかありません。覚えているのはお葬式の時、棺桶に真赤な布がかぶっており最後のお別れの際、子供ながらに遺体を見るのが怖かったのか、棺桶の中で眠る父の顔を見る事が出来なかった事だけです。

それから母の生活は一変します。朝から夜中まで仕事一色の生活が始まりました。小学生になった私は、毎日首から鍵を下げ、登下校しました。

家には誰も居ないからでした。毎日、毎日自分で鍵を開け、電気も点いていない家に帰りました。寂しく、何故か怖く、いつも兄の帰りを待ちました。

そんな中、私が3年生になった頃、母親に異変が起き始めました。毎日、毎日、朝から夜中まで働いていた母は、仕事と育児に追われ笑うことが減り、どんなに忙しくても学校行事には来てくれた母は、ノイローゼになりました。

今で言う、うつ病だったのでしょうか。極端に睡眠時間が少ない事から、少しの物音に異常なまで敏感になり、足音、ドアの開閉の音、水を流す音、とにかく音が睡眠を妨げたようでした。少しでも物音を鳴らすとアコーディオンカーテンの向こうから舌打ちと深いため息が聞こえました。

私はあらゆる音に気を使いました。それはトイレを流す音も同じでした。私はそのうち、ドアを開める事もせず、水を流す事も無くなっていきました。正確に言えば、母親を寝かせてあげたい気持ちから「出来なかった」が正しいでしょう。それでも目を覚ます母を見て、私はトイレに行く事も無くなりました。信じられないかもしれませんが、牛乳パックに小便し学校から帰るとトイレに流しました。お腹が痛くなった時は、ゆっくりと玄関のドアを開け、外へ行き集会場に行きました。

そんな生活が続きながらも、私が4年生になった頃、母親のノイローゼはピークだったのでしょう。自殺未遂を起こしました。その日の夜、何か胸騒ぎを感じた私は母の部屋の前に行き、アコーディオンカーテン越しに「おかあさん？」と声を掛けました。返事が無いのもう一度「おかあさん？」と呼びましたが返事はありませんでした。

恐る恐る、アコーディオンカーテンを開けた所、大量の薬を摂取し首から大量の血を流す母が居ました。意識は朦朧とし、パジャマから布団まで、凄量の血でした。4年生の私には衝撃が強く、全身が震え、兄を呼ぶしか出来ませんでした。中学校になっていた兄は反抗期真っただ中で、その母を見て、一言「死にたければ死ね」と発し家を出てしまいました。今となればその時の兄の気持ちも分かる気がします・・・。

一人残された私は、震える手で救急車を呼びました。数分後、近づくサイレンが響き渡り、団地の中に入って来ました。団地内は騒然とし、「誰？どこの部屋？」となる中、私は救急車に同乗し、病院へ向かいました。治療中、不安の中、一人待合室で待たされていると、同じ団地に住む幼なじみのお母さんが駆け付けてくれました。私は、そのお母さんの姿を見た瞬間泣き崩れた事を覚えています。「頑張ったな！頑張ったな！」と震える私を強く抱きしめてくれました。幸い命に別状はなかったのですが、治療後の母に幼なじみのお母さんがこう言いました。

「子供の前でこんな事したらあかん！子供にこんな姿見せたらあかんし、こんな思いをさせたらあかん！利成さん（父）に謝れ」と。恐らく中学生の兄は似たような感情で、子供を置いて自殺未遂を起こした母に腹がたったのでしょう。この母親のエピソードを聞けば、「酷い母親だ！最低だ！」と思いますか？思うでしょう。ですが、そうなるのです。誰かを亡くすと言う事は、家族の生活が一変するのです。時間に追われ、休まる間もなく働き、先を急ぐ生活を続けければ、なりたくなくてもなるのです。

当然、運転も同じです。時間に追われ、先を急ぐ運転は事故を招きます。お話が大きく逸れましたが、何を伝えたいかと言うと、事故を起こし誰かの命が亡くなれば、被害者も加害者もないのです。

事故を起こせば残された家族に必ず大きな傷跡を残す事になるのです。だから一人一人が時間に余裕を持ち、安全な運転を行う必要があるのです。私はそう思います。それでも働き続けた母は、高血圧から甲状腺の病気を患いバセドウ病になりました。長い期間をかけてある程度克服しましたが、55歳で脳梗塞、58歳で二回目の脳梗塞になり、左側の麻痺は残りましたが、病に勝ち現在も元気に暮らしております。現在は孫に会う事だけが楽しみだそうで、良きおばあちゃんをしております。

当時小学生だった私も、現在は4年生の娘と4歳の息子を持ち、幸せに暮らしております。不思議なものですが、ちょうど私が父親を亡くした歳の息子。母親の自殺未遂を見つけた4年生の娘です。

私はこの二人の宝物に同じ思いはさせません。絶対に私が体験したような経験はさせません。妻のため、娘と息子のために絶対に事故はしません。そんなことを思いながら、娘や息子と遊んだ事や楽しかった事を絵日記にしながら日々を過ごしております。その絵日記が10年後も20年後も続くように願いながら・・・。